

国語の授業で注意すべき言葉

— 「仕手」、「受け手」をめぐって—

小林英樹

群馬大学教育実践研究 別刷

第37号 1～4頁 2020

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター

国語の授業で注意すべき言葉

—「仕手」、「受け手」をめぐって—

小林 英 樹

群馬大学教育学部国語教育講座

Words to note in Japanese language classes

—On *shite*, *ukete*—

Hideki KOBAYASHI

Department of Japanese Education, Faculty of Education, Gunma University

キーワード：敬語、仕手、受け手

Keywords : honorific, agent, patient

(2019年10月31日受理)

1. はじめに

敬語の説明では、「仕手」、「受け手」という言葉がよく使われる。

(1) 校長先生がお話しになります。

(2) お客様を、お見送りしましょう。

(1) では、話すという行為の仕手である「校長先生」を高めるために、「お話になる」という尊敬語が使われており、(2) では、見送るという行為の受け手である「お客様」を高めるために、「お見送りする」という謙讓語が使われている、という具合にである。本稿は、敬語の説明において「仕手」、「受け手」のような意味的な概念は使うべきではないことを論じていく。

2. 本稿における敬語の捉え方

本稿は、(3) の図に基づき、敬語を(4)～(7)のように規定しておく(本稿では、「先生のお名前」のような名詞の敬語は扱わない)。

(3)



(4) 尊敬語

主語を高める。

(5) 謙讓語 I

補語と比べることによって相対的に主語を低め、補語を高める。

(6) 謙讓語 II

絶対的に主語を低め、聞き手への丁寧さを表す。

(7) 丁寧語

聞き手への丁寧さを表す。

誰に対する敬語かという観点で整理すると、次のようになる。

主語への敬語

尊敬語

補語への敬語 謙讓語 I
聞き手への敬語 謙讓語 II、丁寧語

(8) ~ (10) の適格性・不適格性は、次のように説明される（「*」は不適格であることを表す）。

【隣の山田さんに対して】

(8) *妻が母をご案内になりました。

(9) *妻が母をご案内しました。

(10) 妻が母を案内いたしました。

尊敬語（「ご案内になる」）を用いた（8）は、身内である主語（「妻」）を高めており、不適格である。謙讓語 I（「ご案内する」）を用いた（9）は、身内である補語（「母」）を高めており、不適格である。不適格な（8）、（9）に対して、謙讓語 II（「案内いたします」）を用いた（10）は、身内である主語（「妻」）を絶対的に低め、聞き手（「隣の山田さん」）への丁寧さを表しており、適格である。

3. 仕手と主語

尊敬語の規定として、(a)、(b) どちらが妥当か検討してみよう（以下、(i)「先生」は高めるべき人物であるが、「権太」は高めてはならない人物である、(ii) 殴るといふ行為の倫理性については問題にしない、という前提で議論を進めていくことにする）。

(a) 仕手を高める。

(b) 主語を高める。（本稿の規定）

(11) の述語（「殴った」）を尊敬語に変えたら、(12) になる。

(11) 先生が権太を殴った。

(12) 先生が権太をお殴りになった。

(12) は適格であるが、(12) の適格性は、(a)、(b) どちらも予測するところである。(a) は、高めるべき仕手（「先生」）を高めているため、適格になると予測し、(b) は、高めるべき主語（「先生」）を高めているため、適格になると予測する。

(13) の述語（「殴った」）を尊敬語に変えたら、(14) になる。

(13) 権太が先生を殴った。

(14) *権太が先生をお殴りになった。

(14) は不適格であるが、(14) の不適格性は、(a)、(b) どちらも予測するところである。(a) は、高めてはならない仕手（「権太」）を高めているため、不適格になると予測し、(b) は、高めてはならない主語（「権太」）を高めているため、不適格になると予測する。

(15) の述語（「殴られた」）を尊敬語に変えたら、(16) になる（(15)、(16) において、「権太」はパンチを出す仕手であり、「先生」はパンチを受ける受け手である）。

(15) 先生が権太に殴られた。

(16) 先生が権太にお殴られになった。

(16) は適格であるが、(16) の適格性を (a) は正しく予測できない。(a) は、高めてはならない仕手（「権太」）を高めているため、(16) は不適格になると、誤った予測をしてしまう。一方、高めるべき主語（「先生」）を高めているため、適格になると、(b) は(16) の適格性を正しく予測できる。

(17) の述語（「殴られた」）を尊敬語に変えたら、(18) になる（(17)、(18) において、「先生」はパンチを出す仕手であり、「権太」はパンチを受ける受け手である）。

(17) 権太が先生に殴られた。

(18) *権太が先生にお殴られになった。

(18) は不適格であるが、(18) の不適格性を (a) は正しく予測できない。(a) は、高めるべき仕手（「先生」）を高めているため、(18) は適格になると、誤った予測をしてしまう。一方、高めてはならない主語（「権太」）を高めているため、不適格になると、(b) は(18) の不適格性を正しく予測できる。

ここまでを整理すると、次のようになる。

- (a) 仕手を高める。
 - (12)を適格と正しく予測。
 - (14)を不適格と正しく予測。
 - (16)を不適格と誤って予測。
 - (18)を適格と誤って予測。
- (b) 主語を高める。(本稿の規定)
 - (12)を適格と正しく予測。
 - (14)を不適格と正しく予測。
 - (16)を適格と正しく予測。
 - (18)を不適格と正しく予測。

誤った予測をしない規定(適格なものは適格と正しく予測し、不適格なものは不適格と正しく予測する規定)の方が優れていることは言うまでもない。1. で触れたような(a)に基づく説明(「話すという行為の仕手である「校長先生」を高めるために、「お話になる」という尊敬語が使われ……)はするべきではない。

- (19) 校長先生がお話しになります。(= (1))

(b)に基づいて、主語の「校長先生」を高めるために、「お話になる」という尊敬語が使われている、と説明するべきである。

4. 『敬語の指針』の〈向かう先〉

平成19年の文化審議会答申である『敬語の指針』は、〈向かう先〉という言葉を使って謙譲語Iを規定している(〈向かう先〉は、謙譲語の説明でよく使われる「受け手」にほぼ対応するものと思われる)。

- (20) 自分側から相手側又は第三者に向かう行為・ものごとなどについて、その向かう先の人物を立てて述べるもの。(P15)

〈向かう先〉について、『敬語の指針』は、(21)のように述べている。

- (21) ……、「先生からお借りする」の場合は、「先生」は、物の移動の向きについて見れば〈向か

う先〉ではなく、むしろ「出どころ」であるが、「借りる」側からは、「先生」が〈向かう先〉だと見ることができる。「先生からいただく」「先生に指導していただく」の場合の「先生」も、「物」や「指導する」という行為について見れば、「出どころ」や「行為者」ではあるが、「もらう」「指導を受ける」という側から見れば、その〈向かう先〉である。(P16)

かなり無理をしている説明だと言わざるを得ない。(22)において、Bを【向かう先】、Aを【出どころ】とするのが、一般的な言葉の使い方だろう(『敬語の指針』の〈向かう先〉と区別するために、【向かう先】と表すことにする)。

- (22) 本
A → B

謙譲語I(「お貸しする」、「お借りする」)が使われている(23)、(24)がどのように説明されるか考えてみよう。

- (23) その本は、先生に お貸しした。
〈向かう先〉
【向かう先】
補語

- (24) その本は、先生に お借りした。
〈向かう先〉
【出どころ】
補語

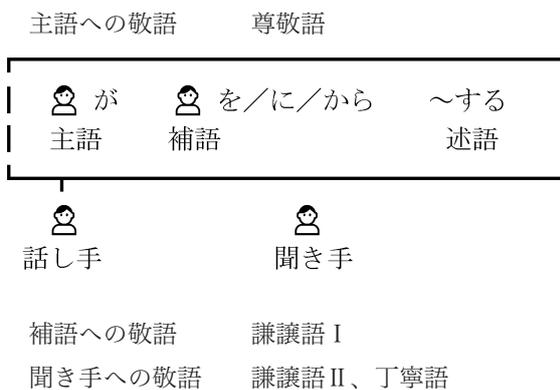
(23)では、〈向かう先〉である(一般的な言葉の使い方でも【向かう先】である)「先生」を立てるために、(24)では、〈向かう先〉である(一般的な言葉の使い方では【出どころ】である)「先生」を立てるために、謙譲語Iが使われている、と『敬語の指針』は説明するだろう。本稿は、尊敬語の説明で「仕手」のような意味的な概念を用いなかったように、謙譲語の説明でも〈向かう先〉、【向かう先】、【出どころ】のような意味的な概念を用いない。(23)、(24)では、高めるべき補語(「先生」)を高めるために、謙譲語I

が使われている、と本稿は説明する((23)、(24) どちらも、補語の「先生」が二格で標示されているが、補語は、共起する述語との意味関係によって、(23) のように【向かう先】になることも、(24) のように【出どころ】になることもある)。本稿の説明の方がシンプルで無理がないだろう。

5. おわりに

本稿は、敬語の説明において「仕手」、「受け手」(『敬語の指針』の〈向かう先〉) のような意味的な概念は使うべきではないことを論じてきた。主語や補語を使った方が無理なく説明できる((3) を(25) として再掲)。

(25)



敬語の説明において注意すべき言葉は実は他にもある。光村図書の国語の教科書(小学校5年、平成27年

度版)は、「ていねい語」を(26)のように説明している。

(26) あまり親しくない人や大勢の人に対して話したり書いたりするときは、「です」「ます」や、「ございます」などの言葉を使います。これらを、「ていねい語」といいます。相手(聞き手や読み手)に対する敬意を表します。(P68)

括弧付きで「聞き手や読み手」であることは示されているが、「相手」という言葉も使わない方がよい。

【鈴木先生に対して】

(27) 私が鈴木先生にご説明します。

(27) では、丁寧語(「ます」)、謙讓語 I(「ご説明する」)が使われている。どちらも、「鈴木先生」への敬語であるが、「ます」は聞き手としての「鈴木先生」に対して使われており、「ご説明する」は補語としての「鈴木先生」に対して使われている。聞き手と補語は、明確に区別しなければならないが、「相手」という言葉を使った説明では、説明された側が聞き手と補語を混同してしまう可能性がある。話し手(「私」)から見れば聞き手(「鈴木先生」)は話す相手であり、主語(「私」)から見れば補語(「鈴木先生」)は説明する相手だからである。(25)において話し手の他に3名の人物(⊗)がいるが、この3名の人物を明確に区別できる言葉を用いて敬語は説明しなければならない。

(こばやし ひでき)